

日语专业系列教材



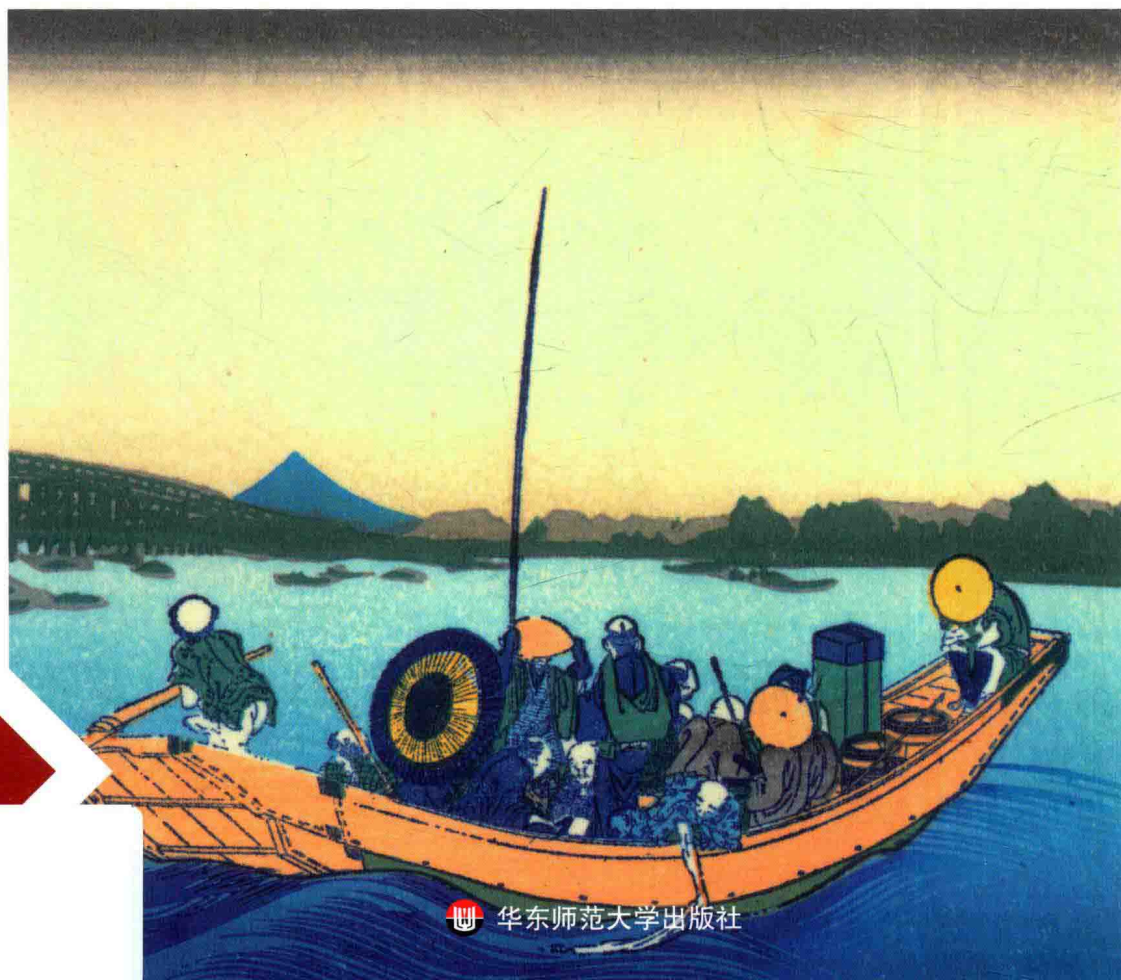
普通高等教育“十一·五”国家级规划教材
普通高等教育精品教材

日本語听力

第三版

学生用书 提高篇

主编 杜勤 高宁



华东师范大学出版社

日语专业系列教材



普通高等教育“十一五”国家级规划教材
普通高等教育精品教材

日本語听力

第三版

学生用书 提高篇

主 编 杜勤 高宁

副主编 川口智久 王丽薇

编 者 (按姓氏笔画排列)

王建英 向野康江 刘杰 乔颖 连小燕

李道荣 杜勤 吴素莲 沙秀程 陆留弟

姜小颖 高宁 徐敏民 徐海明 曹静

韩小龙 彭瑾

图书在版编目(CIP)数据

日语听力(第3版)学生用书. 提高篇/杜勤,高宁主编. —上海:华东师范大学出版社,2016.3

ISBN 978-7-5675-4936-4

I. ①日… II. ①杜…②高… III. ①日语—听说教学—高等学校—教材 IV. ①H369.9

中国版本图书馆CIP数据核字(2016)第050855号

日语听力

学生用书 提高篇(第三版)

主 编 杜 勤 高 宁
策 划 陈 朴 陆留弟 陈丽菲
责任编辑 孔 凡
封面设计 卢晓红 赵玮珺

出版发行 华东师范大学出版社
社 址 上海市中山北路3663号 邮编 200062
网 址 www.ecnupress.com.cn
电 话 021-60821666 行政传真 021-62572105
客服电话 021-62865537 门市(邮购)电话 021-62869887
地 址 上海市中山北路3663号华东师范大学校内先锋路口
网 店 <http://hdsdcbs.tmall.com>

印 刷 者 常熟市大宏印刷有限公司
开 本 787×1092 16开
印 张 6
字 数 95千字
版 次 2016年3月第2版
印 次 2016年3月第1次
书 号 ISBN 978-7-5675-4936-4/H·875
定 价 25.00元(含盘)

出 版 人 王 焰

(如发现本版图书有印订质量问题,请寄回本社客服中心调换或电话021-62865537联系)

出版说明

《日本语听力》教材初版于1998~2001年间,再版于2007~2008年间。历经8年,这次我们决定进行第三版次的修订。

该教材初版之际,其编写工作即得到了日本国际交流基金会的大力支持,每册主编均应邀赴日,在日本语言和文化学界一流专家的指导下,几易初稿直至通过审核定稿。教材一经出版,即得到了国内日语界的广泛认可,每册教材多次印刷,成为我国高校日语专业听力课程的首选教材。

随着时间的推移,日本的社会文化发生了巨大的变化,中国日语教学理念不断更新;广大日语教师在使用过程中有诸多心得,也积累了不少经验,为了满足日语教育的需求,2007年我们进行了修订,是为第二版。将教材的结构由原来的五册改为四册;修订后的“教师用书”改为“教学参考书”,每册均配套CD光盘(并有磁带供选用)。

2014年,为了适应当下日语教学现状和需求,在广泛征求高校教师的意见和建议的基础上,我们再次启动了修订工作。本次修订仍旧保持第二版时的规模,即入门篇(主编沙秀程,日本九州共立大学教授)、第一册(主编徐敏民,华东师范大学教授)、第二册(主编杜勤,上海理工大学教授)和第三册(主编侯仁锋,日本广岛大学教授;梁高峰,西安电子科技大学副教授),每一册修订幅度均在50%以上。根据广大日语专业教学一线的反馈,我们调整了入门篇与第一册、第二册之间的难度衔接;每册均配套CD光盘。特别值得一提的是,我们注重贴近日语国际能力考试的教学需求,不仅调整了听力材料的难度,更增加了部分日语国际能力考试听力题型。

这套教材为国家教育部批准的普通高等教育“十一五”国家级规划教材,我们相信,本次修订后的教材会以更高的质量呈现在广大读者面前,为我国的日语教育作出更大的贡献。我们真诚地希望日语教育的专家、学者以及广大读者继续对本教材提出宝贵的意见,以便不断改进,精益求精。

即将出版

* * *

《日本语听力》教材初版于1998~2001年间。该教材的编写得到了日本国际交流基金会的大力支持,每册主编均应邀赴日,在日本语言和文化学界一流专家的指导下,几易初稿直至通过审核定稿。全套教材由五册组成,即入门篇、第一册、第二册、第三册和第四册。每册配有学生用书、教师用书和磁带。本套教材出版以后,得到了国内日语界的广泛认可,每册教材多次印刷,现已成为我国高校日语专业听力课程的首选教材。

随着时间的推移,日本的社会文化发生了巨大的变化,中国的日语教学理念也不断更新;广大教师在使用这套教材的过程中有诸多心得,也积累了不少经验。因此,我们决定修订这套教材,以适应上述变化,满足不断发展的日语教育的要求。

这次修订后的主教材,由原来的五册改成四册,具体是:入门篇(内容不变)、第一册和第二册(修订内容均在1/2以上)、第三册(内容全新);修订后的“教师用书”改为“教学参考书”,每册均配CD光盘(并有磁带供选用)。华东师范大学的沙秀程(现任日本九州女子大学教授)、徐敏民教授和杜勤教授(现任上海工商外国语学院日语系主任)继续担任入门篇、第一册和第二册的主编,第四军医大学的侯仁锋教授担任第三册主编。

原第一版的第四册改为提高篇,供需要进一步提高听力的学习者使用。

为修订好这套教材,我们曾召开高校日语听力教师的座谈会。上海外国语大学、同济大学、东华大学、上海水产大学等一些高校的日语教育专家和一线的教师,对教材的修订工作提出了宝贵的意见,在此谨表示衷心的感谢。

2006年4月,这套教材被国家教育部批准为普通高等教育“十一五”国家级规划教材。我们相信,修订后的教材会以更高的质量呈现在广大读者面前,为我国的日语教育作出更大的贡献。我们真诚地希望,日语教育的专家、学者以及广大读者继续对本教材提出宝贵的意见,以便不断改进,精益求精。

华东师范大学出版社
2009年4月

* * *

随着我国对外交往的扩大,国内对多种语言交流的需求明显增加,日语在政治、经济、文化等领域中的使用也日益频繁。为适应这种情况,我们规划出版一套《日语听力》教材,并委托华东师范大学外语学院日语系编写。本教材被列入国家九五音像制品重点出版规划。

《日语听力》是配合大学日语专业一至四年级精读课本教学所使用的配套听力教材,共分4册。每册又分教师用书、学生用书,每册学生用书配录音磁带。各册设分册主编,主持编纂事宜。接受编写任务的教师们对于本教材的编写,倾注了极大的热情。他们在多年从事日语教学的基础上,参考东京外国语大学等日本高等学府所编写的母语教育读本,翻阅了大量的资料,对本教材的编纂和听力内容的编排提出了不同于现行一般教材编写的全新思路。其特点之一,在于突破了援用现成的日语出版物进行作业的通行编写模式,所用范文多由编写人员根据需要编撰,体现了较高的独创性。特点之二,是教材的听解内容准确地把握了中国学生较难掌握的薄弱环节以及日语特有的语音、语言现象,在设计上注意切合日本实际社会生活场景,语言真实度较高,从而最大限度地实现了教材与日本现实生活的磨合。特点之三,表现为设问方式灵活多变,注重学生综合听能的提高,同时启发学生用日语思考、解答问题,培养学生的日语实际应用能力。这些努力都是力求使本教材更好地体现实用性、准确性和时代性。

本教材的编写得到了日本国际交流基金会日语国际中心的支持和资助,使第一、二册的编写人员能赴日就教材的编写,与日本国内一流语言机构的专家、学者进行切磋,并在他们的帮助下逐字逐句地修改、审定教材内容。可以相信,本教材无论内容还是形式都会达到国内最好水准。在此,我们对全体编写人员,对日本国有关机构、学校和专家,表示深深的敬意和衷心的感谢!

我们诚挚地希望从事日语教学和研究的专家、学者以及广大读者对本教材提出宝贵意见,以便我们不断改进,精益求精。

华东师范大学出版社
1998年5月

前 言

《日本语听力》编到第4册,难度自然增加不少。有一段时间,我们很难完全按最初设想进行工作。迫不得已,只好放下手中焐热的笔,开始新一轮的调研。具体包括三个方面:一是向广大师生征求意见;二是重新探讨、研究国内外现有各语种的听力教材;三是加强理论学习,查阅相关的学术论著。半年下来,果然所获甚丰,编写构想逐渐形成,并最终成为本册教材的编写原则。

这个原则可以简要地概括为“听解”二字。我们认为高年级的听力教材应把重点转移到“听懂了什么”之上,而不能继续停留在“听到了什么”的层面上,避免那种话虽听得清清楚楚、明明白白,却抓不住其真实意义的现象出现。其实,这种听力上的“词不达意”情况在母语生活中也时有发生,大概人人都有过这种体验。因此,除了培养学生的强记能力,我们更要培养他们的注意力、理解力、良好的听解习惯和较强的现场反应、表述能力。诚如日本学者渡边博包所言,听力的实质“即为充分理解他人之语”;“我们所听的不过是自己正在思考的问题”。所以,我们有必要引导学生从单纯听音过渡到理性听解,并最终走向创造性地、批判性地接受对方话语的高度。

为此,我们尽量挑选一些词句本身通俗易懂,内容却不易把握、抓准的文章或有声材料作为课文,并在具体设问中力求抓大放小,不在枝节、细节问题上做文章,着重宏观把握,主要解决非语言问题所形成的听解难点。具体设问也因课而异,不强求形式上的一致。我们要求每一课都应从头到尾一次听完,而不能分段、分节或分句多次反复听完。因为第4册的教学目的已不再是考察学生的听音、辨音和听写能力,而是要提高他们的整体听解水平。对于少数过于生僻,有碍于听解的词语(那些虽有一定难度,但需要学生自己去判断的词语除外),我们列于课文之前,同时不再编排单词表。同时,为了更充分体现本册教材的编写原则,我们还在每篇课文之后附了1篇“参考课文”,供任课教师选用。具体的设问方式请参照课文,这里略举数例,做个简单的提示。如第16课的第一段“青春というのは、いつの時代にもちよつと背伸びをしようとする。そうだったような気がする。しかし、それは、今は昔の話になりつつあるのだろうか。”文字并不难,但到底是什么意思,却未必每个学生都能理解,需要教师去引导。再如第4课中的“おじさん”和第1课的“僕”、“あの人”也未必人人都知道是指谁。第19课“ヤミ・の話”则是在考听者的时间推算、认定能力。稍不留神,就会相去几十年。至于第5课、第12课、第18课等,需要从总体上去

言 前

把握原文的意蕴。而第10课、第15课内多有“陷阱”，很容易产生理解偏差。此外，第3课、第7课、第9课等又充满了哲理，听的时候还需要动点脑筋。简言之，本册教程可以说是一本专供耳朵听的泛读教材。

本册教材的另一个特点是选用了部分原始有声材料，如录音采访、录音对话等，以求更加贴近实际生活，让国内的学生在课堂上也能接触到一些活生生、未加雕琢的日语。此外，选编的课文中，只要有录音带的，我们都用原录音带，不再新录，尽量避免录音的单一化。

经过日语系全体同仁近一年的努力，第4册终于可以付梓了。在此，我们要特别感谢几位日本教授的加盟。这不仅壮大了编写队伍，而且也增加了本册教材的“含金量”。他们是原日本一桥大学教授、华东师大日语系专家川口智久先生；茨城大学副教授、华东师大日语系外教向野康江先生；长崎西博尔德大学（長崎シーボルト大学）教授横山宏章先生和日本《文艺春秋》原编辑、宣传部长中本洋先生。川口先生和横山先生专门为本教程撰写课文并亲自录制磁带，向野先生不仅参加了本册教材的具体编选工作，而且还和陆留弟教授连袂录制了一篇采访式课文。中本先生则为本册教材日语文字的最后把关者，他不仅通读了全文，而且对具体的设问及其参考答案进行了认真仔细的修改和润色。

本册教材由杜勤、高宁主编，杜勤统稿。有声材料的审核和部分课文的录音工作由吴素莲协助完成。具体的录音由杉山明男、杉山祥子担任。

最后，我们向大力支持本册教材编写工作的华东师大出版社朱杰人社长、陈朴副社长、陈丽菲先生、赵金土先生致以由衷的感谢。同时，欢迎广大师生提出宝贵意见，使这枝引凤之箭能够射得更准一些，离目标更近一点，同时唤出更多的金凤玉凰。

杜 勤

高 宁

初稿于1999年12月31日 改定于2000年3月9日

目次

1	第1課
4	第2課
8	第3課
12	第4課
16	第5課
20	第6課
24	第7課
27	第8課
30	第9課
33	第10課
36	第11課
40	第12課
44	第13課
48	第14課
51	第15課
55	第16課

目次


58	第17課
61	第18課
66	第19課
69	第20課
72	第21課
76	第22課
80	第23課
84	ラキスト出処一覧表
86	参考文出処一覧表

第 1 課

テープを聞く前に次の言葉を覚えましょう。


ミックス:混合 ^{どうらく}道楽:嗜好 ^{いくだっ}逸脱:脱离 ^{とうかち}等価値:等价

テープを聞いて、後の問いに答えなさい。

 **問題 I** キーワードをいくつか挙げなさい。

 **問題 II** 次の質問に答えなさい。

1. どうしていま日本の大学が危機になっているのでしょうか。
2. そんな危機の中で、文部省は何をしようとしていますか。
3. 今までの国文学は何をするのに役に立っていましたか。
4. これからの国文学はどんな末をたどっていくのでしょうか。

 **問題 III** 次の文がテープの内容と合っていれば○、違っていれば×をつけなさい。

1. ()

2. ()

3. ()



問題 IV

1. 文部省のいう「がくさいか」の「がくさい」というのは漢字で書くと、次のどれに当たりますか。正しいものを一つ選び、その記号に○をつけなさい。
 - a. 学際
 - b. 学才
 - c. 楽才
2. 話し手は文部省の大学に対する改革姿勢についてどう思っていますか。正しいものを一つ選び、その記号に○をつけなさい。
 - a. 肯定的
 - b. 否定的
 - c. どっちとも言えない



問題 V 次の問いを読んだ上、文章をもう一度聞きなおしてください。
そして、口頭で次の問いに答えなさい。

1. 文部省が行なおうとしている大学に対する改革姿勢とその方策について簡単に述べなさい。
2. これから国文学はどうやって生き延びていくべきかについて話し手の見解をまとめなさい。
3. あなたにとって中国文学というのはどんな存在ですか。これからの中国文学はどういう形で存読すべきですか。日本のような大学改革が中国の大学でも行われる必要がありますか。クラスの皆さんの前であなたの感想を述べてみなさい。(200字ぐらい)

参 考 文

写 真

ある醜い——と言っては失礼だが、彼はこの醜さゆえに詩人になんぞなったのにちがいない。その詩人が私に言った。

僕は写真が嫌いでね、滅多に写そうとは思わない。四五年前に恋人と婚約記念に取ったきりだ。僕には大切な恋人なんだ。だって一生のうちにもう一度そんな女が出来るという自信はないからね。今ではその写真が僕の一つの美しい思い出なんだよ。

ところが去年、ある雑誌が僕の写真を出したいと言って来た。恋人とその姉と三人で写した写真から僕だけを切抜いて雑誌社に送った。最近また、ある新聞が僕の写真をもらいに来た。僕はちょっと考えたんだよ、しかしとうとう、恋人と二人で写したのを半分に切って記者に渡した。必ず返してくれるように念を押しておいたんだが、どうも返してくれないらしい。まあ、それはいいさ。

それはいいとしても、しかしだね、半分の写真、恋人一人になった写真を見て僕は実に意外だった。これがあの娘か。——ことわっておくが、その写真の恋人はほんとに、可愛くって、美しいんだよ。だって彼女はその時十七なんだ。そして恋をしている。ところがだ、僕と切離されて僕の手に残った彼女一人の写真を見ると、なあんだ、こんなつまらない娘だったのかという気がした。今の今まであんなに美しく見えていた写真がだよ。——永年の夢が一時にしらじらと覚めてしまった。僕の大切な宝物が毀れてしまったんだ。

してみると、——と、詩人は一段と声を落した。

新聞に出た僕の写真を見れば、やはり彼女もきっと思うだろう。たとえ一時でも、こんな男に恋をした自分が自分で口惜しい、とね。——これで、みんなおしまいだ。

しかしもし、と僕は考える。二人で写した写真がそのまま、二人が並んで新聞に出たとしたら、彼女はどこからか僕のところに飛んで帰って来やしないだろうか。ああ、あの人はこんなに——と、言いながら。

第 2 課

テープを聞く前に次の言葉を覚えましょう。

ミエミエ: 赤裸的

「はだか」の付き合い: 坦誠的交往

チームワーク: 協同配合

じゅんかつゆ
潤滑油: 潤滑油

テープを聞いて、後の問いに答えなさい。



問題 I キーワードをいくつか挙げなさい。



問題 II 次の質問に答えなさい。

1. なぜ話し手は外国の日本文化研究会の人々に真っ先に飲み屋へ行きなさいと言うつもりですか。
2. 会社では絶対に聞けない言葉が聞けて、話し手はふっとどんなことを感じたのですか。
3. なぜ夜の町は日本のビジネスマンにとって必要ですか。
4. 「理屈じゃないよ、お酒は」の具体的な意味を説明しなさい。



問題 III 日本語の中には「酒の上でのはだかの触れ合い」を意味する言葉がありますが、それを言いなさい。



問題 IV テープの最後に「私は日本へ来てもう一つの油を見つけたような気が致します」とありますが、その「油」の意味するものを一つ選び、その記号に○をつけなさい。

- a. ビジネスマンの出世するための知恵
- b. 生きる活力を得るための手段
- c. 人間関係の潤滑油
- d. 日本の繁栄を支えるための原動力



問題 V 文章の内容に合うテーマを考えなさい。

参 考 文

手 紙

思いなしか、近ごろ手紙を受け取ることが、かなり少なくなったように思う。郵便物の量はやたらに増えるのだが、そのほとんどが宣伝パンフレットや通信販売や公共料金通知の類で、個人からの葉書、封書はまれにしか手にすることがない。それすら、会の知らせや、転居、転職の挨拶ぐらいがせいぜいで、しかも活版で印刷されたものがほとんどだ。何とも淋しい気がする。

原因は、おそらく通信システムの発達にあるのだろう。わざわざ手紙を書かなくても電話でたいい事が足りる。ファクシミリなどという便利な機械もすっかり普及した。葉書や封書にしてもワープロを叩けば、手書きよりも手短かに、はっきりと文面が作成できる。

というわけで、ペン書きの、まして筆による書簡などというのは、もはや過去のものになりつつあるのではなかろうか。げんに、かく言うべく自身、便箋にペンで近況をつづって知人に送るようなことは、きわめて稀なことになってしまった。そうなると手紙を書くのがいよいよ億劫おっくうになる。そして、そんな自分を顧みながら、何とゆとりを失った生活か、と、つくづく情けない思いがする。

それに比べ、昔の人は、じつによく手紙を書いている。蕪村にもたくさんの書簡が残っており、漱石にもおびただしい数の礼状や返書があって、全集(岩波、新書版)のうちの、なんと五冊までが「書簡集」にあてられている。そうした手紙の中には、格式張った挨拶状なども散見されるが、大半は個人の生活や感想を率直にしたためたものであり、したがって当人の人柄をしのぶのに最良の手がかりを与えてくれている。だから、書簡というものは、時によると、作品以上に自己を告白しているといつてよい。

蕪村、漱石、二人の書簡集を読みながら、ぼくがあらためて感慨ひたに浸ったのは、時代は異なるにせよ、現代とくらべて天明、そして明治の文人の交遊世界がじつに豊かであったということだ。むろん、当今の人たちも、それぞれに交際範囲を持ち、生活感情をつたえ合っているにちがいない。けれど、何といても日常のテンポが速すぎる。心にどこかゆとりを欠いているように思えてならない。手紙はいまや、「書類」や「連絡メモ」のような味気ないものになってしまっている

のではなからうか。

とすれば、今後、作家や詩人たちの「書簡集」などというものに、あまり期待できないのではないかという気にさえなってくる。

もうひとつ、あらためて気がついたのは、昔の人は心のこもった贈り物をよく取りかわしているということだ。蕪村、漱石の手紙には、いたるところ贈られた品に対する礼の言葉がつづられている。

たとえば、贈答の習慣は現代のほうが、もっとひろがっていると思われるかもしれない。たしかに中元とか歳暮、結婚や出産のお祝い、入学や昇進、あるいは誕生や還暦の記念など、品物の贈答は昔とは比較にならぬほどふえているようだ。が、現代では、そのほとんどがデパートその他の販売ルートと結びついており、そうした流通機構にのった、いわば、「反射的な」儀礼のようにになっているように思われる。